

# 南都諸寺の調査

平城宮跡発掘調査部

## 1 法隆寺の調査

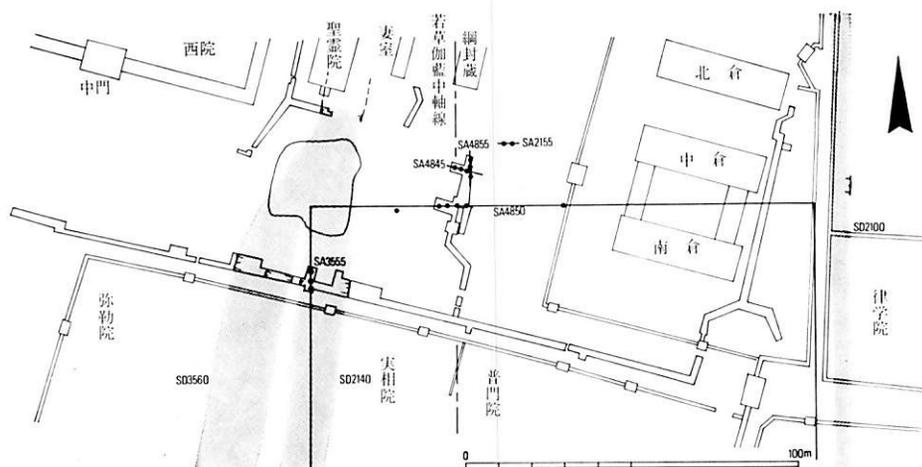
1982年度の法隆寺防災工事に伴う発掘調査は、1982年4月から1983年3月まで実施した。設定したトレンチは57カ所で、東院・西院の全域におよんだ。発掘総面積は2,200㎡である。

この結果、西院地区では若草伽藍関係の遺構を検出し、東院地区では絵殿、舍利殿東側で鎌倉時代の瓦窯を検出するなどの成果をあげた。ここでは若草伽藍の遺構を中心に述べる。

食堂・綱封蔵の南では、若草伽藍の方位(N17°40'W)にほぼ直交する掘立柱東西塀SA4850を検出した。このSA4850は、若草伽藍の金堂と塔の midpoint の北約106.2m(高麗尺300尺)にあり、若草伽藍の北を画する塀と考える。この塀の北側には若草伽藍に伴う雑舎の柱穴がある。

東大門と西大門間の参道に設けた発掘区のうち、花園院北で2条の南北溝SD2140・3560と南北塀SA3555を検出した。SD2140は谷筋にあたり、昨年度および本年度、この発掘区の北60mの聖霊院前でも上流の一部を検出した。このSD2140は若草伽藍の造営に伴って7世紀初頭に埋め立て、南北塀SA3555を設けた。このSA3555は若草伽藍中軸線の西44.5m(高麗尺126尺)に位置し、主要伽藍の西辺を画する塀であろう。南北溝SD3560はSD2140の迂回溝である。その埋土からは7世紀中葉の土器が出土した。

昨年度、西院と東院の間地域で検出した南北大溝SD1001の東肩は、若草伽藍中軸線から東117mに位置し、若草伽藍東辺の地割溝であろう。この溝の西に接して塀あるいは築地塀の存在を想定すると、伽藍中軸線からの距離は高麗尺300尺となる。以上の推定に誤りがなければ、若草伽藍の中軸線から西辺の塀までの距離が若干短い、伽藍の中心は主要伽藍の西三分之一に位置したことになる。法隆寺『法隆寺発掘調査概報Ⅱ』1983 参照 (森 郁夫)



法隆寺調査遺構図

## 2 薬師寺中門・回廊の調査

薬師寺中門の再建に先立つ事前調査で、中門跡全域と南面東回廊の一部、計670m<sup>2</sup>を発掘した。中門の概略は、1015(長和4)年の『薬師寺縁起』(以下『縁起』と略す)に述べられており、973(天禄4)年に焼失し、986(寛和2)年に再建したとある。

**中門の遺構** 中門は基壇上面が削平されており、また礎石がすべて抜き取られていたが、礎石抜き取り穴から復原した中門の規模は桁行5間、梁行2間、桁行総長24m(81尺)、梁行総長7.4m(25尺)である。柱間寸尺は桁行中央3間が17尺等間、両端間が15尺等間、梁行が12.5尺等間である。『縁起』には中門が「長五丈一尺、廣二丈五尺」とあり、桁行が3丈短い。これは再建中門の規模を記したとする立場があるが、後に述べる基壇断ち割りの結果からみても基壇を修復した痕はみられず、『縁起』の記載が誤っている。中門の基壇は東西27.33m(93尺)、南北13.32m(45尺)で、礎石位置のみ掘りこむ坪地業を行っている。坪地業は基壇築成の途中に行い、大量の瓦を叩きこみ根がためしている。再び版築を行った後、据え付け掘形を掘り、礎石を据える。1981年の南大門の調査では、礎石据え付け掘形を掘らずに基壇版築塗上で根石、礎石を据えた知見が得られており、中門と南大門では礎石の据え方が異なる。調査の所見からは、基壇構造に明確な修復の痕跡は認められず、本調査で検出した基壇は創建期のものである。従って、寛和2年の再建中門は、創建基壇をそのまま踏襲したのであろう。

中門の前面両端間の中央で二王像の台石とみられる花崗岩を各2対、計4個検出した。それらは上面平坦な直径80cmの不整形の石で、上面に径25cm、深さ約30cmの柄穴を穿つ。それぞれの柄穴からは焼土と共に計約200片の塑像破片が出土した。この台石を囲んで門の前方と中央部にひらくL字形の幅約90cmの凝灰岩製の台座痕跡がある。これは『縁起』の「左右立二王像并夜叉形天、及座鬼形等合十六躰」とある二王像<sup>又</sup>と他の仏像の台座であろう。二王像は、出土の塑像破片からみて塑像であり、台石の配置からみて向い合っていた可能性がある。

基壇周囲の化粧は凝灰岩切石の壇上積で、2時期ある。創建期の化粧石は南面の東から2間目のみ残り、地覆石と羽目石とを一体に削り出す。改修時のものは不揃いで一部には転用材を用いる。これらは裏込めに焼土を混じえ、再建時の化粧であることを示す。

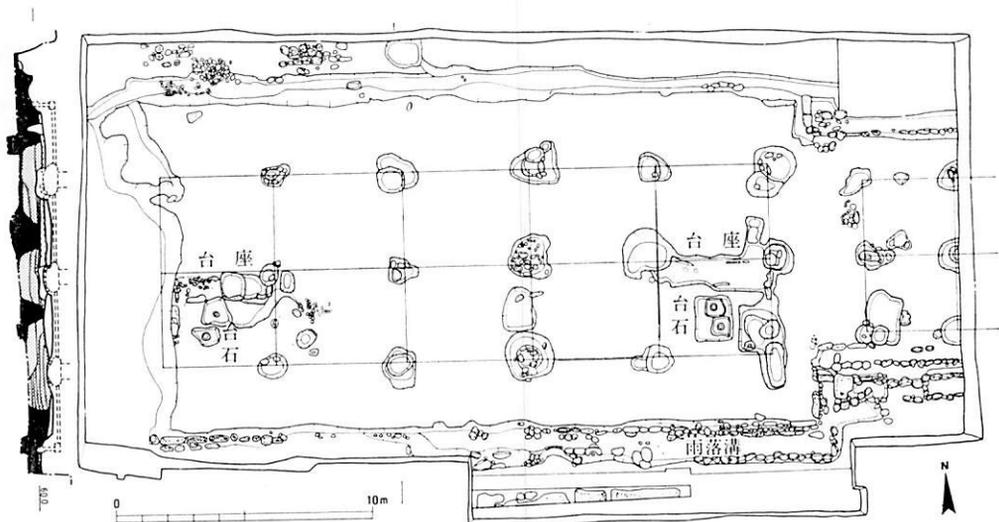
石階は踏石の一部を基壇の前面において検出した。その位置は中門の中央3間分、長さ5mにわたる。踏石は幅27cm、厚さ5cmの板状の凝灰岩列からなり、創建期の地覆石列に対応していることから、同じ時期の石階の1段目踏石底部と考える。この踏石の大きさ、位置から割りつけると、石階は4段で踏面が27cm、蹴上が21cm、基壇高は約80cmに復原できる。またこの石階の南に石階と幅員を同じくし、南大門へ続く凝灰岩の敷石遺構が存在する。

雨落溝は中門の南北両面にあるが、北面雨落溝は遺存状態が悪く、部分的に玉石の抜取痕跡を検出したのみである。南面雨落溝は土層の関係から2時期にわけられる。下層の雨落溝は径30~40cmの上面平坦な玉石と板状の凝灰岩からなる底石が残る。この雨落溝の底面は基壇地覆石の据え方より上層にあるので、創建期のものとは考えがたく、創建当初は雨落溝がなかった

可能性が強い。下層雨落溝と上層雨落溝の間には厚い砂層と焼土層が挟まる。この砂層には10世紀後半の遺物を含み、973（天禄4）年の火災直前に洪水があったことを示す。洪水が基壇周辺を浸蝕し、基壇化粧を壊したものであろう。上層雨落溝はこの砂層を一部掘り込み幅約1mに拡幅される。上層溝の北肩は基壇裾部に連なる径10～20cmの玉石列で、同じく南肩は径30～40cmの玉石である。ただ、この溝は回廊部へ続くが、雨落溝としては規模が大きく、この地区の基幹排水路の機能をも兼ねていた可能性がある。北面雨落溝の更に北には帯状の玉石敷舗装があったようで、一部に径約20cmの玉石敷が残る。

**回廊遺構** 中門に取りつく南面回廊は西側がすべて現代の池で削平されていたが、東回廊部では1間分の礎石、礎石抜き取り穴、基壇地覆石、南北両雨落溝などを検出した。それによると、回廊は桁行3.6m（約12尺）、梁行2間、3m（10尺）等間の複廊で、基壇の幅員は約10m（33尺）である。これは、1968年の東面回廊の調査で得た桁行寸尺、14尺とは異なる。この理由は本調査区が中門へのとりつき部にあたり、柱間寸尺の調整のために桁行をやや短くしたためであろう。回廊と中門とのとりつき部はゆるい登廊になっていた。基壇の化粧は凝灰岩の切石積であるが、中門とは異なり地覆石と羽目石が別材でつくられている。

雨落溝は南北両面で検出したが中門と同様、北側は攪乱がひどく、詳細は不明である。南側では径約30cmの玉石列で南肩を護岸している。この溝は粘質整地土層上に敷設され、その下には中門で観察したのと同様に焼土層、砂層がある。しかし、砂層の下には中門にあった下層雨落溝は検出できなかった。回廊の礎石は移動した跡がないことからみて、回廊は973年の火災の後、中門と同じくもとの規模で再建されたものであろう。なお、1954年の調査では、この再建回廊の後に、再々建単廊を建てた可能性を示唆されているが、今調査ではそうした単廊の存在を裏づける痕跡を得ることはできなかった。（松井 章）



薬師寺中門・回廊調査遺構図